

開館1周年記念講演 「昭和初期の和風建築」

平成21年4月29日(祝)

講師 植松清志氏

今日は「昭和初期の和風建築」についてお話しします。まず「和風」というものをどのように考えるのか。現在と江戸時代の「和風」とはまったく違います。現在の「和風」というのは江戸以降、洋風建築が入ってきてから成立了のですが、「和」ということが意識されるのは平安時代頃からです。

日本文化の源流がそのまま中国にあると考えるのは間違いで、奈良・平安時代前期の文化は、中国の影響を受けていますが、平安時代後期に遣唐使が廃止されると、中国文化の影響を抜け出して独自の文化を求めるようになります。これを「和」「和様」、または「大和風」などといいます。

平安時代の貴族の住宅は、寝殿造りと呼ばれ、その起源は中国の貴族の住宅にあるといわれています。平面は、間仕切りのほとんどないワンルームで、床は板張りでした。やがて畳を敷き詰められ、屋が区切られるようになります。空間を仕切るものが御簾(みす)から板戸になり、襖障子に変化します。室町時代に、造り付けの床の間・違い棚・書院が出現し、現在の和風住宅の原型といわれる書院造りが成立します。

建具が発達した背景には、大工道具などの工具の発達があります。工具が発達すると、建築物の構造も変化し、建具の装飾や細工も細かくなります。古代の建築物は構造が未発達なため、太くて大きな材料で建築されました。中世になると、身近で大材が得にくくなることもあります。細い材で造られるようになり、技術的な発展と意匠の自由化がみられます。技術が発展すると、その技術を継承していくために、中世末から近世にかけて秘伝書が記されるようになります。

桃山時代の建築物は、漆塗りの装飾や金箔などを用いた豪華ななものでしたが、1657年の江戸における明暦の大震で、それらを引き継いだ多くの建築が焼失しました。江戸時代には、秘伝書が木版の印刷物として市中に出まわり、秘傳でなくなってしまう部分も生じ、技術が均一化されていきます。その結果、規格化が進み、意匠の自由さがなくなる反面、精密な積算が発達します。

江戸時代の建築の装飾は、桃山時代に比較して質素なものが多いようです。また、書院造りは、二条城二の丸殿などのように、一室一機能で、非常に大規模なものが出現します。一方、座敷の格式と形式が整うのに従って、建築制限も行われるようになります。例えば、庶民の家では、書院や欄間、違い棚などは設けることはできませんし、長押(なげし)や釘隠しを打つことも御法度です。床の間は、框(かまち)に塗り仕上げの制限が行われます。折り上げ格天井は、格式の高い武家屋敷の座敷だけに許されていましたが、近代になると武家以外にも見られるようになります。



幕末から明治時代には、外国人の居留地が設けられます。地方の大工達は、横浜の居留地や建築物などを参考に、各地で見様見真似の洋風の建築物を造りました。このような初期の洋風建築は「擬洋風」と呼ばれています。日本人はこういう導入は非常にうまく、和風しか知らなかつた大工が、積極的に洋風を取り込むことによって、近代の庶民の和風意識が少しづつ変わつていきます。また明治初期には、外国の技術者によって次々と本格的な洋風建築物が造られ、そこに日本の大工が関わることで技術も洋風化していきました。

明治 20 年代になると、上層階級から洋装が定着し、接客などには洋室が用いられるようになります。明治時代になって、建築制度がなくなったことで、庶民でも床の間を設けて座敷の格式を整えることができるようになります。

昭和時代に入ると、軍部の力が強くなり、国威の発揚や青年の育成が重視されるようになります。この時代には、鉄筋コンクリート造の建築物に瓦屋根をかけるなどの和風の意匠を施した、「帝冠様式」の建築物が建てられるようになります。代表的なものに、神奈川県庁舎（昭和 3 年）、軍人会館（現九段会館、昭和 9 年）などがあります。一方で、第四師団司令部（旧大阪市立博物館、昭和 6 年）のように、軍部の施設でありながら、ヨーロッパの城郭を思わせる洋風建築物も造られています。

昭和の初めには、和風住宅にも洋室が積極的に取り入れられるようになります。和風の母屋に、ベランダのある洋風の応接間が設けられ、洋風の照明器具や暖炉、窓にはステンドグラスが入っています。一方、長押が施された座敷には、大きな床の間や書院が設けられ、次の間とは欄間でつながっています。主たるところは和風できちんと造られますが、洋風も違和感なく取り入れられています。

昭和 15 年頃になると戦時色が濃くなり、資材調整のため鉄筋コンクリートの建築物はほとんど造られなくなり、木造の武道場的な建物物が多くなります。昭和 16 年に建築された麗天館も、この種の建築物で、左右対称をした美しい建築物です。この様な青年道場というのは全国各地で造られましたが、現在ではほとんど残っていません。島本町はよくこれを残されました。壊すのは簡単ですが、今これと同じものを造ろうとしても、技術や予算などの面で問題が多く、なかなかできません。そういう意味でも非常に大事な建築物です。

では、こういう江戸時代から明治・大正・昭和時代へと受け継がれてきた和風は、今後どうなっていくのでしょうか。日本の高温多湿という気候を考えると、畳の部屋がなくなったとしても、玄関で靴を脱ぐ生活様式は残るでしょう。そして床材が畳からフローリングになったとしても、冬場はホットカーペットの上にコタツを置くという、座式の生活様式が継承されると思います。これからは、畳があるか無いかなどではなく、ひとつの型に当てはまらない自由な発想の「和」が続いていくのではないでしょうか。

* レジュメに従い、スライドを見ながら多くの事例を拝見し、講演をして頂きました。